

「旧下ヨイチ運上家」

北海道余市町

運上家は、江戸時代、松前藩(実質的には場所を請負った商人等)によって設置された和人とアイヌ人の交易所であり、運上家運営の経緯は、松前藩や和人の蝦夷地進出と漁業開発、アイヌの人との交易関係等を伝える貴重な文化遺産である。

松前藩は、農業生産による収入が少なく、蝦夷交易権にその経済的基盤を置き、道内各地に商場(場所)を設け、アイヌの産物と本州からの移入物資との交換を収入とした。初期の頃には直接交易を行ったが、経営の失敗等から場所経営は仕込み、前貸しという形で商人に委ねられ、藩は場所請負の上納金(運上金という)

に依存するようになった。場所請負人は、運上家を設置し、最初はアイヌ人との交易を主としたが、やがて和人が増えるに従いアイヌ人を使役し、自ら大規模漁業を営み、運上家は場所請負人の企業基地となり、さらに、その土地の経済、行政拠点となっていく。その後、明治に入って場所請負制は廃止され、北海道における運上家は本陣、会所、旅籠、番屋等になり、消滅していった。

ヨイチに運上家が建設された時期は明らかではないが、天明年間(1781-1788)の運上金は、マシケ(増毛町)場所に次ぐ300両(上ヨイチ140両、下ヨイチ160両)という高額の優良漁場であったことが伺える。上下ヨイチの場所請負人は、文政8年(1825)に藤野喜兵衛から竹屋長七(初代林長左衛門)に変わり、以後場所請負廃止まで4代に渡り林家に受け継がれた。竹屋長七は、秋田県象潟町の出身で、松前に渡り商業を営み、以後、アッケシ(厚岸)場所、上下ヨイチ場所の請負人となった。

旧下ヨイチ運上家は、嘉永6年(1853)に改築した当時の古図面を基に復元されたものであり(明治20年頃に曳き屋を行い現在の向きになる)、国の史跡及び重要文化財として、漁業開発やアイヌ人との交易等を伝えている。

【参考資料】「重要文化財 旧ヨイチ運上屋保存修理工事報告書」 パンフ「旧下ヨイチ運上家」



安政年間のヨイチ鳥瞰図(余市町指定文化財、町内個人蔵)

みどころ



- フゴッペ洞窟：昭和25年に発見された、続縄文時代の洞窟遺跡。内部の壁画には、角や翼で仮装した人物や、舟、魚等800以上の刻画が描かれている。日本ではじめてカプセル方式の施設により保護され、発掘された土器や石器とともに公開されている。昭和28年に国指定の史跡となった。
☎ 0135-22-6170